

協会活動報告

「引揚70周年記念の集い」

快晴の10月20日(木)、「引揚70周年記念の集い」が開催されました。当日は朝早くから会場の東京・中央区「銀座ブロッサム中央会館」には参加者が定刻前から集まり始め、開会の午後1時半には700人を超える方々で会場はほぼ満員となりました。参加者は、北は山形・新潟そして、南は高知・広島・福岡と、全国各地からご参集いただきました。高齢に達している体験者の方々は、それをおしのご参加、集いへの熱い思いに頭の下がる思いでした。

会場は厳粛のうちにも寛いだ雰囲気の中、定刻通り司会者の開会宣言で始まりました。冒頭、引揚げのさなか無念にも故郷の地を踏めず、亡くなられた方々に鎮魂の黙とうを捧げました。続いて矢野一彌会長が参加

者への謝辞と、70周年記念の集い開催の意義を述べ、集いは始まりました。

プログラムの冒頭は、加藤聖文先生(国文学研究資料館准教授)の基調講演「海外引揚げ70周年―体験の継承」があり、引揚げの実態を総括的に報告しました。

1945年の終戦時には、アジア・太平洋地域には多くの民間人が在留していた。地域別では満洲が最も多く約127万人、次いで中国49万人、台湾33万人、朝鮮半島72万人、樺太39万人となり、約330万人の方々が、在住していたこととなる。

当初、日本政府は輸送船舶の不足や港湾の機雷封鎖、国内での食糧不足などを勘案し、短期間の引揚げは不可能と判断、

3年以上の「現地定着方針」を打ち出し、その後は連合国がどうにかしてくれよとの政府の希望の観測は打ち砕かれ、

ソ連軍侵攻地域での混乱、中国の国民党と共産党の内戦激化などにより中国の国内情勢が予想以上に悪化した。加えて、中国本土に残留する旧日本軍約100万の傭兵化を恐れた米国は、対中国政策を転換、早期に日本軍の武装解除と早期帰国を即すこととなる。これに合わせ、民間人の早期送還が実現し、45年末から日本軍民の送還が開始された。

引揚げの状況は地域により異なるが、満洲では国民党軍が満洲に進駐して初めて、日本人の送還が開始され、米軍の大半は46年中に帰還した。満洲を除いたソ連軍占領地域では、日本人およびシベリヤ抑留者の送還は46年から米ソが交渉を開始し、46年末から送還が開始される。問

題となったのは32万人が残留していた北朝鮮で、ソ連軍が占領していたが、政治主体もなく主権が存在していなかったため、保護・送還の責任主体が存在せず、難民化や伝染病の蔓延など状況の悪化を招いた。その結果、ソ連軍の黙認のもと日本人の集団脱出が始まり、米ソ協定成立後の46年12月から48年7月までの公式引揚げ者はわずか7000人余りにしかならなかった。

引揚げは大戦後の中国をめぐる複雑な国際情勢が絡み合う中で作業だったが、戦後の日本ではこういった複雑な状況をほとんど理解せず、その後激しくなった東西の冷戦により、「アメリカ善×ソ連悪」という単純構図で国際政治の単純構図が定着したのは残念でならない。しかも300万人を超す民族の大移動であった海外引揚げ者は、戦後の混乱の中、日本社会に埋没、とくに敗戦前後に起きた悲劇的イベントは開拓団員に集中し、引揚げ後の生活再建も他

の引揚げ者とは異なり、過酷であったことを忘れてはならない。

そして、そもそも引揚げ者はなぜその地に居住していたのかを考えなければならぬ。近代日本の対外膨張の歴史と密接な関係があり、大日本帝国は多民族国家であったことが忘れられているのは、今日の歴史認識をめぐる軋轢の一因である。引揚げという視点から東アジアの歴史的關係を捉えなおすことが肝要だと締めくくった。

この後は歌唱のアトラクションがあり、小休止の後、シンポジウムに移り以下の諸氏が参加しました。

▼コーディネーター

藤原作弥（元日銀副総裁）

▼パネリスト

松重充浩（日大文理学部教授）

満洲担当

井上卓弥（毎日新聞編集委員）

朝鮮担当

渡邊三男（全国樺太連盟会員）

樺太担当

河原 功（台湾協会理事）台湾

担当）

松重氏は研究者の立場から、満洲に居住した多民族の多様性に着目し日本人の居住した意味、多民族とどう関わったのかなど70年前の事実や体験の資料をひとつひとつ拾い上げていく努力が必要であり、時の経過とともに資料が散逸し、体験者も激減し、時間との勝負だが、丁寧に掘り下げる必要があると訴えた。

井上氏は満洲に渡った祖母の手記を基に朝鮮における満洲難民の記録を調べ始めて、『満洲難民 三八度線に阻まれた命』を書いた。朝鮮北部には北西部の日本人居留民と満洲からの日本人疎開者、南部にはソ連軍の侵攻にさらされた日本人居留民がいた。特にソ連管理地の実態は「抑留」であり、国際的な人道救援団体の入境を認めず、集団脱走が試みられた。資料が残っている「郭山疎開隊」は満洲国經濟部と出征遺家族1000人ほどの集団で、列車で新京を出発するも安東から朝鮮に入

るも郭山で放置、越冬し多くの死者を出した。北朝鮮の実態は戦後国交がなく、不明な点が多い。

樺太からの引揚げ者である渡邊氏は1933年の生まれで、ソ連軍が塔路町に上陸し戦闘が行われたことを記憶している。そして、46年12月から4年間かけて29万人の日本人が引揚げている。あの豊かな島にいつか戻れることを夢見ている人たちもいる。

河原氏は台湾について報告。軍民合わせて48万人ほどいたが、46年軍人優先で引揚げが開された。邦人還送業務はすべて沖繩籍兵士が使われた。理由は、帰る場所が無かったからである。また、留用者が多く出たのも特徴の一つである。また、引揚げ者団体も早く結成され、52年の日華平和条約以降、在外資産の返還などの運動を行った。

意見の交換では、悲惨な体験を資料として残し、若い人に伝え、平和を築いていくことが大

切であることが結論となりました。

集いは定刻通り、午後5時半に終了。参加者は三々五々帰途につきましたが終了後の感想では、よかったと評価する声が多く、「他の地域の引揚げ実態を知らなかった」、「加藤先生の話聞いてアメリカのおかげと分かった」などの意見も聞かれた。他にも、文献や著書をお持ちになる方、集会に参加した団体を知らなかった人、体験者と交流しなかったとの要望もありました。

（福島靖男）